

【憲法第九条 戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認】

- 1 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
- 2 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

【もう二度と戦はしない（第九条）】

私たちは、人間らしい生き方を尊ぶという
まことの世界をまごころから願っている

人間らしく生きるための決まりを大切にする
おだやかな世界を
まっすぐに願っている

だから私たちは
どんなもめごとが起こっても
これまでのように、軍隊や武器の力で
かたづけてしまうやり方は選ばない

殺したり殺されたりするのは
人間らしい生き方だとは考えられないからだ
どんな国も自分を守るために
軍隊を持つことができる

けれども私たちは
人間としての勇気をふるいおこして
この国がつづくかぎり
その立場を捨てることにした

どんなもめごと
筋道をたどってよく考えて
ことばの力をつくせば
かならずしずまると信じるからである

よく考えぬかれたことばこそ
私たちのほんとうの力なのだ

そのために、私たちは戦をする力を
持たないことにする

また、国は戦うことができるという立場も
みとめないことにした

（井上ひさし『子どもにつたえる日本国憲法』より）

語注 ・基調…作品・思想・言動などの底を流れる基本的な傾向。

・希求…願い求めること。こい願うこと。

・威嚇…威力を相手に示しておどすこと。おどかし。

《設問》

この文章は、「憲法第九条」の条文とそれをわかりやすく書き換えた文章です。このふたつを参考に後の語群の語句をすべて用いて、君が考える憲法第九条がつくられた理由を二〇〇字程度で述べなさい（ただし、指定された語句はどのような順序で用いてもかまわないものとする）。

・人間らしい生き方 ・国際平和 ・軍隊や武器 ・話し合い ・解決 ・放棄

次の文章を読んであとの設問に答えなさい。

「こまでのお話

自分の子どもを失った母狐が、村はずれの電話ボックスで、離ればなれに暮らしている母親に電話を掛ける幼い子どもを見て、亡くしてしまった自分の子と重ね合わせて、愛情豊かな目で幼い子を見つめることで、心にポツカリ空いた大きな穴を埋めている。そんなとき、電話ボックスがとりばすされてしまうことに…。

でんわボックスのあかりがつくころになると

きつねはきまつてやまをおりて、おとこのこをまちました。

「かあさん、きょう、おじいちゃんとえきにいったんだよ」

「まあ、よかったわね……」

「それから、アイスクリームたべたよ。

おじいちゃんのぶんまでぜーんぶ」

「まあ、おなかをこわさなかった？」

きつねは、しらずしらずのうちにへんじをしていました。

おとこのこはおじいさんとふたりぐらし。

おかあさんは、とおくのまちで

にゆういんしているらしいのです。

「かあさん、いつかうみにいこうね。それまでは、でんわで

いいんだ。ぼく、でんわでもうれしんだもん」

「そうよ。かあさんもうれしいわ……」

「かあさんって、ぼくらがうれしいと、

いつもうれしいうんだね」

「……ええ、そうよ、そうよ」

きつねは、なんともうなずきました。

やがて、やまにつめたいかぜがふきはじめました。

あるばん、いつものように、ふもとにおりてきたきつねは

どきつとしました。

でんわボックスに、あかりがついていないのです。

すると、むこうからくるまがやってきました。

「なんだ、このでんわつかえないのか。

ふるいからとりはずすんだってさ」

くるまから、おとこたちのこえがきこえます。

「とりはずすですって」

きつねがびつくりしていると、むこうからばたばたと

ちいさいあしおとがきこえてきました。

「きつとあのこだわ。どうしよう……。でんわがつかえない

とわかったら、どんなにがっかりするかしら」

きつねは、おろおろとつぶやきました。

「かわいそうに、せめてここに、もうひとつでんわボックス

があればね……。ああ、わたしが、でんわボックスのかわ

りになれたらいいのに……」

と、くやしそうに、あしをだんだんとふみならした

そのときです。

「あっ！」

きつねはさけびました。

きつねは、しゃんとうしろあしでたちあがって、

いつのまにか、でんわボックスにかわつていたのです。

「あれっ、でんわボックスがふたつもある」

おとこのこはびつくりしたようでしたが、

まよわずきつねのむねのなかにとびこみました。

じゅわきをもつコスモスのようなてのひらから、

あたたかさがつたわってきます。

「もしもし、かあさん！」

ふわんとあまいにおいがしました。

「かあさん、きこえる？」

「は、はい、きこえるわ……」

きつねは、どきどきしながらこたえました。

「かあさん、あのね……」

「はいはい、おじいちゃんとえきにいったんでしょ？」

「ううん、ちがうよ」

「わかった、アイスクリームたべたのね。おいしかった？

それよりかあさんは、ぼうやといっしょに

きのおみのおだんごたべたいなあ」

きつねがおもわずちようしにのると、

おとこのこはわらいだしました。

「ちがうったら。もうすぐぼくたち、かあさんのいる

まちにひっこすんだよ。だから、もうでんわを

しなくてもいいんだ。だって、まいにちかあさんに

あえるんだもん。ああ、はやくあいたいなあ」

きつねはふいに、あたまがくらくなりました。

もう、おとこのこにあえなくなるではありませんか。

きがつくと、きつねはゆめからさめたように、

ぼんやりすわっていました。

むねのなかには、まだ、おとこのこのぬくもりが

のこっています。

ほっぺのあまいにおいものこっています。

ヒュウルルッ とつぜん、つめたいかぜがふきました。

きつねはいそいで、でんわボックスにはいりました。

すると、いままできえていたでんわボックスのあかりが、

ふるえながら、ゆつくりとよりはじめたのです。

「あら……」

きつねは、ふと、あたたかいきもちにつつまれました。

だれかにだかれていたような、

やさしいきもちになったのです。

「よかったわ、あのこがおかあさんにあえて、

わたしも、あのこのおかげで、

ぼうやをおもいだすことができたもの」

（戸田和代『きつねのでんわボックス』より）

《設問》

問一 この文章から読み取れるきつねの性格を三十五字以内で簡潔に書きなさい。

問二 ――― 線部1「きつねは、なんともうなずきました」とありますが、このときのきつねの気持ちを三十字程度で具体的に書きなさい。

問三 ――― 線部2「きつねは、どきどきしながらこたえました」とありますが、このときのきつねの気持ちを三十字程度で具体的に書きなさい。

問四 ――― 線部3「きつねがおもわずちようしにのると」とありますが、このときのきつねの気持ちを三十字程度で具体的に書きなさい。

問五 ――― 線部4「ヒュウルルッ とつぜん、つめたいかぜがふきました」とありますが、この表現は、きつねのどのような気持ちを表していますか。三十字程度で具体的に説明しなさい。

問六 ――― 線部5「いままできえていたでんわボックスのあかりがふるえながら、ゆつくりとよりはじめた」とありますが、でんわボックスはどのような気持ちでこうしたのですか。三十字程度で具体的に説明しなさい。

※すべての問の制限字数には句読点・符号を含むものとする。